

## 令和5年度 第102回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

### 「昌平高校 2年連続6度目の優勝」

報告者：高体連技術委員 細田学園高校 上田 健爾

#### 1. 大会概要

2023年10月8日から2023年11月14日にかけて、インターハイ予選ベスト8のシード校8校（武南・浦和南・昌平・正智深谷・西武台・狭山ヶ丘・埼玉平成・川越東）とSリーグ参加17校、さらに一次予選突破校23校を加え計48校による、ノックアウト方式のトーナメントで40分ハーフ、延長20分、決着が付かない場合はPK方式で勝者を定めるルールで行われた。今大会ではここ数年禁止されていた声出し応援や入場のセレモニーが復活し、伝統ある埼玉県の熱い活気のある選手権となった。

1回戦から熱い試合が繰り広げられ、最終的には優勝昌平高校、準優勝浦和南高校、3位武南高校、聖望学園高校という結果で幕を閉じた。

#### 2. 大会傾向

勝ち上がり傾向としては、シード校が早期に敗退することが少なくベスト8に5校が残ったことや、準決勝の2カード共に大差の結果になったことは特徴的だった。

トーナメントということで守備を固めるチームが多くなる中で、今大会のベスト4に入ったチームは、守備の構築だけでなく、攻撃においてスタイルは違うがチームの強みや個の力で得点を奪える力が備わっていた。準決勝は先制点が大きくゲーム展開を左右し、スペースが生まれる展開になり、それを見逃さない力のある2チームが結果的には大量得点で勝ち上がった。

一方で、ゴールキックからのビルドアップやGKを使つてのビルドアップが少ない傾向にあった。負けたら終わりのノックアウト方式の中で、リスクを避ける心理であったであろうが今後必要なタスクになるのでチャレンジすべき点であろう。

#### 3. 決勝進出高校分析

##### 昌平高校

一人ひとりのテクニック・フィジカル・フィットネスが高いチームである。攻撃時は個のキープ力をベースにゲームを展開していく。個のテクニックが安定しているので時間を作ることができ、その間に全体でポジションをとり攻撃していく。特にMF⑦土屋、MF⑩長、MF⑧大谷は卓越したドリブルとパスでチームに安定したボール保持の時間を与える。

こうして作られた安定したボール保持は相手の視線をボールに集中させる。相手がボールに目を奪われれば透かさず、ボールから遠い選手が相手の背中を狙い攻撃の動き出しを創出する。さらに、アタッキングエリアでは各選手が即興性のあるプレーで相手ゴールに迫っていく。また、攻撃時に近いポジション関係をとっているため、ボールを失えばすぐにボール奪取し、二次攻撃を仕掛けていく。この回収率が高いのが昌平高校の生命線になっており、

攻守一体の関係性が作られている。

今大会の昌平高校は、決勝戦でゴールを決めた左 SH⑰三浦や 1 年生の MF⑩長など交代選手がゲームを決める、もしくは動かし、選手層の厚さを感じた。

#### 浦和南高校

守備時には 1-4-1-4-1 の陣形で、コンパクトフィールドを形成し、マンツーマンを意識した守備でボールホルダーへ連続したプレスをかけ、ボールを奪うと、優先順位を意識した縦に速い攻撃から相手ゴールに迫る。その勢いで奪ったセットプレーでは、精度の高いキックとデザインされた動き出しで多くのチャンスを創出する。

攻撃では、FW⑨石川をターゲットにしてボールを前進させ、中盤の回収からサイドに展開し、相手陣内での時間を増やしていく。そこに推進力のある MF⑩伊田やテクニックのある FW⑬志田、さらに途中出場でリズムを変えることができる MF⑳日高が関わりゴールを生み出していく。今大会の浦和南高校は高い強度の守備だけではなく、攻撃力も磨いてきた様子が見られ、準決勝の聖望学園高校戦での 5 得点は圧巻であった。

#### 4. 終わり

シーズン最後のトーナメントという中で、各校チーム戦術が浸透し、良いゲームを多数見ることができた。その中でも個の技術や即興性で差をつける選手がいたことも素晴らしいことだったと感じる。

しかし、課題も見ることができた大会でもあった。シーズン最後のトーナメントという心理状況の中やコンパクトに強度ある守備を展開するチームが増えた中で、リスク回避したプレーや戦略が多かったのも事実であろう。全国レベルや世界レベルに目を向ければ、その状況下でもボール保持を成功させる技術とチーム戦術、さらには相手のプレスを恐れないメンタリティが必要である。

終わりに、埼玉県代表の昌平高校は、本大会で持てる力を十分に発揮し実りある大会となることを期待する。